

「神さまに委ねる」

哀歌3章25～27節

日本キリスト教団吉祥寺教会牧師 吉岡 光人

古代ユダヤの首都エルサレムは、強国バビロニアによって激しい攻撃を受け廃墟と化してしまいました。そして多くの人々が遠くバビロンの地に連行され、捕囚の生活を送らなければならなくなりました。ユダヤの人々の心には大きな哀しみが広がりました。しかし哀歌の著者はこう言います。

主に望みをおき尋ね求める魂に
主は幸いをお与えになる。
主の救いを黙して待てば、幸いを得る。

先のわからない状態で、見えないものをただ「待つ」ということは辛いことです。目にすることができるものの方が確かなものだと感じてしまいます。しかし、「そうではない！」と聖書は言うのです。「目には見えないけれども、神さまは確かに生きておられて、必ず幸いを得させてくださる、だからジタバタせず神さまを信頼して待ちなさい」と言っているのです。実際、ユダヤの民は「目に見えない神に委ねる」ことによって、目の前の厳しい現実を乗り越えたのです。

17世紀前半のドイツに、パウル・ゲルハルトという牧師がいました。彼の生まれた時代、ドイツ全土で「30年戦争」という悲惨な戦争が続いていました。とてつもなく多くの人たちが戦闘で死に、飢餓で死に、ペストなどの伝染病で死んでいきました。パウル・ゲルハルトも幼い時に両親を相次いで失い、孤児として育てられました。彼は大学で神学と詩学を学び牧師になろうとしましたが、戦争中でしたので職が得られず、家庭教師などのアルバイトをして生活しなければなりません。40歳になった頃、ベルリンの教会から招かれて、ようやく牧師として働くことができるようになりました。それから彼は結婚し、子ども5人生まれました。やっと安定した、幸せな生活を手に入れたかのように思われました。しかし、5人の子どものうち4人は早く死んでしまい、妻も病気で死んでしまいました。愛する者に次々と先立たれてしまう人生、パウル・ゲルハルトの人生は何と失うことばかりの人生だったのでしょうか！

しかし彼は、不幸の連続のような壮絶な人生でも、決して神を恨むことはしませんでした。むしろ彼は、生涯を通じて神を賛美する美しい賛美歌をたくさん作りました。次々と不幸なことが起こるのに、決して絶望することなく、自分に与えられた才能を生かして、美しく力強い賛美歌を作り続けたのです。彼の創作した賛美歌は多くの人々の心を慰め、荒れた時代にあって、神を信頼して生きることの大切さを気づかせました。やがてパウル・ゲルハルトの賛美歌は、時代を超え、国を超えて、世界中の教会で親しまれ、歌われるようになりました。

作曲家のヨハン・セバスチャン・バッハは、不朽の名作と言われている「マタイ受難曲」の中で、パウル・ゲルハルトの賛美歌をいくつも使っています。その中の一つに「あなたの道を

主にまかせて」という作品があります。

あなたの道を 主にまかせて
思いわずらい 主にゆだねよ。
雲と風にも 道を示す
神は歩みを 導かれる (『讚美歌 21』 528 番第 1 節)

自分の命をすべて神に任せる時にこそ、人は哀しみや不安を持ちつつも、それを乗り越える力を得ることができます。現代の言い方をすれば、その人の中にある「回復力」(“レジリエンス”)が呼び覚まされるのです。自分自身の精神力によってではなく、「神さまに委ねる」ことによって、次々と襲ってくる困難の中にも絶望しないで生きられる、それが聖書の薦める生き方なのです。

神さま、わたしたちは今とても厳しい状況に直面していますが、必要以上に不安になることなく、あなたがこの状況の只中にもわたしたちと共にいてくださることを信じて、平安に生きることができますように一人一人を支えてください。

2020年10月15日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「苦難を乗り越える」